

令和元年度財務書類について

企画財政部財政課

1 作成した一般会計等財務書類の概要（主な数値）

※表示単位未満を四捨五入しているため、合計が一致しない場合があります。

①貸借対照表

貸借対照表とは、基準日（年度末時点）での財政状態（資産・負債・純資産の残高及び内訳を表示したものです。

資産は財源等の運用状況を表し、負債は将来世代の負担を表し、純資産は資産から負債を差し引いたものです。

平成 30 年度末時点貸借対照表

【資産の部】 65,408百万円	【負債の部】 18,628百万円
	【純資産の部】 46,779百万円

令和元年度末時点貸借対照表

【資産の部】 68,098百万円	【負債の部】 18,855百万円
	【純資産の部】 49,243百万円

資産の部は2,690百万円増加しており、主な理由はごみ処理施設長寿命化工事や小中学校の改修工事等による建物（建物附属設備含む）の増によるものです。

負債の部は227百万円増加しており、主な理由は小中学校空調設備のリースが開始となったことによるその他負債の増によるものです。

②行政コスト計算書

企業会計における損益計算書にあたるもので、一会計期間（年度）中の行政活動に係る費用と行政サービスの受益者負担の関係を表しています。

経常費用（サービスに係る人件費・物件費等）	経常収益（使用料及び手数料）	純経常行政コスト
23,287百万円	837百万円	22,450百万円

経常費用は、行政サービスの提供に費やしたものであり、経常費用から、施設の使用料等の経常収益を差し引いたものが純経常行政コストとなります。

③純資産変動計算書

純資産が、どのように増減したかを区分して表したものです。
企業会計における株主資本等変動計算書にあたります。

	期末純資産残高
平成30年度	46,779百万円
令和元年度	49,243百万円

純資産額は、2,464百万円増加しています。
これは、純行政コストよりも財源が上回ったことによるものです。

④資金収支計算書

資金の流れを示すもので、その収支の性質に応じて区分することで、どのような活動に資金を必要としたかを表すものです。

	金額
業務活動収支（継続的に実施される現役世代に係る活動の収支）	1,155百万円
投資活動収支（道路建設など将来世代に係る活動の収支）	685百万円
財務活動収支（地方債など将来世代が負担する収支）	△436百万円
本年度資金収支額	1,404百万円

各活動の結果、1,404百万円の資金が増加しました。

2 財務書類からわかること ※（）内は平成30年度数値

①有形固定資産減価償却率 73.0%（72.2%）

【説明】

有形固定資産のうち、償却資産の取得に対する、減価償却累計額の割合です。耐用年数に対して、償却資産（建物等）の取得からどの程度経過しているかを把握することができます。100%に近いほど、老朽化が進んでいるといえます。

【算出式】

$(\text{減価償却累計額} \div (\text{有形固定資産合計} - \text{土地等の非償却資産} + \text{減価償却累計額}))$

②基礎的財政収支（プライマリーバランス） 476百万円（△122百万円）

【説明】

地方債の借入・償還などの財務活動収支を除いた業務活動収支、投資活動収支のバランスを見るもので、自治体財政の持続可能性を分析する指標のひとつです。建設事業や大規模な施設修繕等投資的な事業に地方債を活用することで赤字となることがあるため、中長期的にバランスを見ていきます。

【算出式】

業務活動収支（支払利息支出を除く）＋投資活動収支（基金を除く）

③受益者負担比率 3.6% (5.8%)

【説明】

行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を示すものです。行政コスト計算書の経常収益はほとんどが受益者負担の金額であるため、経常収益の行政コストに対する割合が受益者負担比率となります。サービスの効率化、適正化等を実施し経常費用を削減すると、受益者負担比率は上昇します。

【算出式】

経常収益÷経常費用